

読売新聞・大阪府の包括連携協定

読売新聞大阪本社と大阪府が結んだ情報発信など8分野の包括連携協定。公正な報道のため公権力と距離を置くべき報道機関が、取材対象の地方自治体と「一体化」する異常事態に、各界から批判の声が上がっています。→談話特集③面

神戸女学院大学名誉教授



内田 樹さん

「読売新聞と大阪府との包括連携協定に抗議します」という声明に短期間で5万人を超える賛同があったのは、それぐらいみなさんが怒っているところでしょう。ジャーナリスト有志の会一同の声明（7日現在）は、それがうまいみなさんが怒っているところでしょう。

ジャーナリズムの品位と権威を失墜させるなど。最初、このニュースを見て思つたのは「もう新聞はビジネスモデルとして成立しなくなつた」とふりひびいた。購読料と広告料だけではもう経営が回らなくなつた。公権力の保護を受けないと経営が持たないといつまで貧しくなつた。「貧すれば鈍する」です。

読売新聞がこれまで権力の監視役としての役割を果たしていくかどうか僕は懷疑的ですけれども、この権力との「連携」は異常に複雑な状況で運んでいます。

「読売は維新と組んだ」という印象を読者が抱けば、支持政党が違う読者は離れていく。それでも算盤が合つて、大阪府との連携には経済的な「うまみ」があるといつたのでしょ。しかし、新聞はただ出来事を報道するだけのものではありません。それを解釈し、分析し、その文脈を示し、読者の現実理解を支援するのが仕事ですし、同時に、全国紙の場合ば、多様な意見が行き交う會議の場を提供することによって国民的な対話を形成するためのプラットフォームの役割も担ってきました。だ

私が子どもの頃、NHKで「事件記者」というドラマが放送されていて、記者は子どもにとってあこがれの職業でした。自由で、活動的な記者の姿はたいへん魅力的でした。でも、今は新聞記者はもうあこがれの職業ではなくなっている。

ジャーナリズムの威信に傷

からこそ不偏不党・公正・中立が求められてきたのです。包括連携協定を結ぶことで、大阪の行政についての読売新聞の評価が客観的で公正であると信じる読者は減じるでしょう。そうやって読者の信赖を失うことはメディアとしては自殺行為です。

私が子どもの頃、NHKで「事件記者」というドラマが放送されていて、記者は子どもにとってあこがれの職業でした。自由で、活動的な記者の姿はたいへん魅力的でした。でも、今は新聞記者はもうあこがれの職業ではなくなっている。

現場でがんばっている読売の記者には気の毒ですが、読売の威信を深く傷つけてしまいました。